

保育指導案作成の理解を深めるための一考察

本 村 弥 寿 子

Study for a better understanding of childcare teaching plan created

Yasuko MOTOMURA

キーワード : 保育指導案 指導案作成 教育実習 保育実習

1 はじめに

本学幼児教育学科の学生は、将来、保育所や幼稚園の保育者になることをめざして入学してくる。入学当初、「子どもが好きだから保育園の先生になりたいと思いました。」と、笑顔で明るく入学の動機を話す学生も、時間割を作成して学ぶ科目の多さに改めて驚き、不安な表情を見せることがある。さらに、日々の授業を受講していく中で、保育者として学ぶべき内容の多さと難しさに一層不安感が増し、保育士や幼稚園教諭の資格・免許を取得することの大変さを実感していく。しかし、“保育者になりたい”という夢をかなえるために、学生たちは2年間、一生懸命に課題に取り組み、見事に保育者として巣立って行っている。

さて、2年間の学びの中で、学生が一番不安を感じていることは何だろうか。学生によって様々であろうが、一つは実習が挙げられるだろう。そして、さらに、実習の中で最も苦勞しているのは「指導案」であろう。慣れない環境で1日を過ごし心も体も疲れ切った中で日誌を書き、加えて指導案も書かなければならない。速やかに書けるものであれば苦勞はないが、学生にとっては難しく、睡眠時間も削っている状態である。これでは、日々の疲れも十分に抜けないため、翌日の実習に差支えが出るであろう。

では、なぜ、学生は指導案が書けないのであろうか。開(2012)は、学生が指導案を書けない理由を2つ挙げている。一つは、指導案の書き方の

ルールを理解していないこと、そして、二つ目は、指導案に書く内容が思いつかないということだ。これは、著者も同感である。著者が、ある国立大学教育学部の附属幼稚園に勤務していた時、指導案の書き方を実習生に示すために、まず我々附属幼稚園の教官が指導案を作成して保育を実践してみせた。保育終了後は指導案を踏まえた反省会を行い、保育の評価の仕方も学生が理解できるようにしてきた。さらに、学生の指導案作成時には、3日以上かけて保育の内容をじっくり話し合い、保育を行う当日の様子を学生が考えられるようにサポートしてきた。まさに、“指導案を書けない2つの理由”を克服するためであった。

現在、著者は、実習生を受け入れる立場から送り出す立場となって4年目である。指導案の書き方を教える科目、「カリキュラム論」も担当している。本稿では、この4年間の取り組みを振り返りつつ、一層学生が理解しやすい授業内容及び方法について検討を進めていきたい。そして、学生が指導案に対して苦手意識を持つことなく作成に取り組めるようにしたいと考える。

2 カリキュラム論について

2.1 授業方法及び内容

受講対象：幼児教育学科1年生

開講時期：1年時後期

本科目は、幼稚園教諭免許・保育士資格を取得するための必修科目である。そのため、毎年1年

生全員が受講しており、平成27年度受講者数は104名である。授業は104名を2クラスに分け、週に1回、90分ずつの授業を15回行っている。

内容は表1のとおりである。前半は、保育の計画の種類や作成上の留意点等についての理論を学ぶ。そして後半、指導案について理解したところで作成に入る。

表1 カリキュラム論 内容

1	幼稚園教育・保育所保育の基本・目的
2	カリキュラムの基礎理論
3	教育課程・保育課程の編成
4	指導計画について
5	3歳児未満の保育計画
6	3歳以上児の保育計画
7	保育指導案について
8	保育指導案作成の手順・書き方
9	指導案の作成（課題1）①…降園時
10	指導案の作成（課題1）②…降園時
11	指導案の作成（課題2）①…活動時
12	指導案の作成（課題2）②…活動時
13	指導案の作成（課題3）①…日案
14	指導案の作成（課題3）③…日案
15	まとめ（指導案作成時の留意点確認）

2.2 授業の実際

一般社会では、幼稚園や保育所の保育者は、子どもの世話をしたり一緒に楽しく遊んだりしているだけと思われている。本学科学生も、初めはそうのように思っている者が少なくない。そこで、保育は養護と教育が一緒になった教育活動であり、子どもの実態を適切に把握した上で保育の計画を立て、計画に基づいた実践を行い、実践を評価・反省して次の保育に生かさなければならないことを、授業全体を通して伝えている。また、“教育活動”というと、学生のイメージは小学校以降の学校教育と重なり、保育者が子どもにとって有益と考えることを一方的に教え与える様子を思い描く傾向がある。そのため、指導案を実際に書いてみると、「～を子どもにさせる。」「～と教える。」といった文章が多い。そこで、保育は環境を通して行われるものであることや、子どもの主体的な活動を促すように行われるものであることを繰り返し言い聞かせている。

このように、保育の基本や、小学校以降の学校教育とは異なる保育の独自性を伝えることが、この授業で重要視している部分の一つである。この理解が十分でないまま指導案を書いて保育を行っても、子どもの思いを大切にしたい子ども主体の保育は展開できないと考える。

2.2.1 保育指導案作成の内容

指導案とは、保育者の保育観を他者に伝えるものである。つまり、保育者が子どもの姿をどのようにとらえているのか、そこから何をねらいとするのか、ねらいを達成するためにどのような援助を行うのかを伝えるものである。しかし、保育経験の少ない実習生にとっては、保育の流れや段取りをつかみ、子どもを見たり援助したりする際のポイントをつかむ、いわば自分のために作成する覚書という意味合いが強い。そこで、「カリキュラム論」では、表1に示したように、第8回の授業でまず指導案作成の手順や指導案の形式と書く内容について学ぶ。そして、課題1から課題3までの3種類の指導案を実際に作成し、活動をどのように流していくか、保育者は何をポイントとして援助すればよいのかということと、指導案を作成するときの約束事を重点的に学んでいる。

その学びの内容を、以下に述べる。

2.2.2 保育指導案の形式

保育者が何を大切にしたい保育を行うか次第で指導案の形式は変わる。保育の初心者である実習生にとっては、保育をどのように進めていくのか把握することが必要になるため、一般的に“流れ重視型”の指導案を作成することが多い。本科目でも、“流れ重視型”で授業を進めており、形式は表2のとおりである。

欄ごとに書く内容は次のようなものである。

〈子どもの姿〉

前日までのクラスの子どもの様子を書く。ねらいにつながる子どもの姿を書くが、事実を書き並べるだけでなく、子どもの内面や育ちを記述することが大切である。

表2 流れ重視型指導案の形式

保育指導案

保育者氏名

月日	年齢クラス名	男児数	女児数	合計数
子どもの姿	・ ・ ・	ねらい	・	
時間	予想される子どもの活動	援助・指導の留意点	環境	
9:00	○登園する。 ・あいさつを交わす。	・		

〈ねらい〉

保育の目標を達成するための指導の方向性を示す。子どもの生活する姿をもとに発達過程を見通し、子どもの心情・意欲・態度について具体的に設定する。

〈時間〉

子どもの活動を時間の流れに沿って、活動が変わるごとに書く。

〈予想される子どもの活動〉

ねらいを達成するために積み重ねたい、具体的な活動を書く。子どもが主体的に活動を展開していく過程を予想し、期待される活動を時間軸に沿って書くようにする。

〈援助・指導の留意点〉

ねらいが達成されるように、保育者が子どもと直接かかわって行う直接的な援助を書いていく。その際、「～と指示する」「～させる」などの指示的な内容や保育者の行動の羅列ではなく、子どもの内面を考慮した具体的な援助を書くことが重要である。

〈環境〉

ねらいを達成するために保育者が環境に対して行う働きかけや、準備物、場の雰囲気・状況等を書く。具体的な環境構成が分かるように、図や絵を利用すると良い。

保育は“環境を通して行う”ことが基本である。

そのため、“時間”の欄のすぐ右横に“環境”欄を示した形式が現場で使われていることが多くなってきている。しかし、学生は子ども理解が十分でなく、現場の保育者のようにねらいから日々の保育を考えることは難しい。つまり、ねらいやねらいを達成するための環境を先に考えることから始めると、指導案作成にスタートからつまづいてしまうのである。そこで、本科目では、学生が取り組みやすい活動設定型の指導案を書くべく、“予想される子どもの活動”欄を“時間”欄の右横に配置している。

2.2.3 保育指導案作成の流れ

現場の保育者であれば、自分が保育で大切にしていることが明確にあるため、指導案作成も速やかにできるであろう。しかし学生は、保育で何を大切にすべきかわからない状態で指導案を書かなければならない。そこで、本科目では、学生が実習先で担任と打ち合わせをすることで、つまり“指導原案”作りから“指導細案”“指導案”と、3段階を踏んで取り組んでいる。

① 指導原案

授業者が、その日の保育で大切にしたいことや子どもの様子等保育のポイントとなることと、どのような活動をどこで行うのかを学生に示し、大まかな流れを共に考えて組み立てている。保育の流れは“予想される子どもの活動”欄にすぐ生かせるよう、保育の流れに沿って端的に考えるようにしている。

② 指導細案

学生が実習において自信を持って保育を進めていくことができるよう、実際の保育を予想して、子どもの姿や保育者の援助、環境を具体的に細かく書いていく。「保育者である自分がここで何と言って言葉を掛けようか」「いつ道具を提示しようか」「子どもはどのように動くだろう」など保育者がすべきかわかりや準備、子どもの様子を思いつくだけ書き出していく。

学生は保育の経験がないため、保育を思い描くことが難しい。そこで授業では、“予想される子どもの活動”の一部を抜き出して、教員が様々な

子どもの様子を学生に示し、学生と共に援助や環境構成、保育者の段取り等を指導細案に書き込んでいく方法をとっている。

③ 保育指導案

指導細案に書いたことから、当日の保育の中で特に重要となる部分、つまり、ねらいを達成するために必要と考える援助等を厳選し、指導案を書いていく。

指導案の目的は、保育者が子どもをどのようにとらえ、何をねらって何をするのかを他者に伝えることである。したがって、指導細案のように、保育者が話す言葉を劇の台本のように書き並べたり、保育者のする段取りや手順が書いてあったりするだけではなく、保育者のかかわりの理由を書くことが重要となる。

学生にとって、指導細案と保育指導案の書き方の違いを理解するのはかなり困難なようである。そこで、学生が作成した文章を授業のなかで教員と共に添削したり、学生を個別に指導したりして理解を促している。

2.2.4 「カリキュラム論」で作成する保育指導案の種類と内容

保育指導案は、一度の学びで書けるようになるものではない。また、学生は実習において、初めに「お集まり」等の短い時間の保育から始め、次に1時間ほどの設定保育、最後に1日保育と、様々な種類の指導案を書くことになる。それを踏まえて、「カリキュラム論」では、3種類の課題を設け、指導案を3回作成することを通して、指導案についての学びを順に進められるようにしている。

〈課題1〉

学生が初めて作成する指導案である。実習生は日常的に絵本の読み聞かせ等を任されることが多い。そこで、降園前の“お集まり”の時間から降園までを想定し、約30分の保育の流れを学生に考えさせている。

降園前の時間は、子どもが先生や友達と1日を振り返ったり「お話」を聞いたりする楽しい時間である。「終わりよければすべてよし」のことわざが示すように、短時間とはいえ、子どもが十分

に満足感を味わう時間となれば「今日も楽しかった」という気持ちで降園することができ、情緒面も安定して子どもの発達に良い影響を与える。また、降園の時間は、“お帰りの支度”という生活に必要な様式を子どもが身に付ける時間でもある。学生は、子どもが生活に必要なことを自分の力で行い、クラスの友達と楽しく過ごすためには、どのような30分にすればよいのかを考えることが必要である。特に、生活の様式を子どもが身に付けるために、保育者がどのような援助をすべきかを学生がしっかり考える機会となるよう、課題1は3歳児クラスを想定する。

〈課題2〉

学生が実習で行う設定保育を想定し、課題2として取り入れている。題材は、学生が6月の教育実習で実際に行うことが多いと考えられる製作活動、“時計作り”である。課題1が3歳児を想定したため、ここでは4歳児を想定する。

保育現場ではこの時期に時計作りをよく行っている。それは、6月10日が“時の記念日”であるからだ。時の記念日について、また、目に見えない“時間”について、4歳児にどのような話をすればよいのか。どのような手立てをとれば、子どもが時間に興味・関心を持つのか。さらにそこからどのように時計作りにつなげていくのか。学生にこのようなことを考えさせながら、保育における活動には意味があり、ねらいを明確に行わなければならないことを伝えている。

製作活動に関しては、4歳児の発達に合った時計作りはどのようなものか、また、危険物である“はさみ”や日常生活で何気なく使っているものの、子どもにとって使用することに抵抗がある“のり”をどのように使わせるかなど、使用する用具や材料をいかに扱うかについても考えさせるようにしている。

またここでは、子どもの作品に対する保育者の見方についても学生に揺さぶりをかけている。大人の感覚で“きれい”であるか“上手”であるかを判断していいのだろうか。手指の発達がまだ十分でない、そして保育者でも思いつかないような様々な感性を持っている子どもたちが作成したも

のを、どのように評価しどのように援助すると良いのだろうか。このようなことを学生に問いかけながら、子どもの思いのこもった作品一つ一つを、保育者がいかに扱うべきか考えさせている。

学生にとっては、自分が作成した指導案の内容が子どもにとって楽しいものかどうか、また、保育をスムーズに流せているかといったことが大きな問題である。そこで、保育の様々な活動は、“導入”“展開”“まとめ”の3段階で考えることを伝えている。

〈課題3〉

実習で、学生が1日担任を任された時の指導案を作成する課題である。5歳児クラスを想定し、子どもが1日自由に遊ぶ日を想定して作成する。授業者は、設定した日の前日の子どもの様子を文章にして学生に示し、そこから学生が“子どもの姿”“ねらい”を自分で考える。さらに、課題1と課題2で学んだことを生かし、“予想される子どもの活動”“援助・指導の留意点”“環境”を自分でまとめ上げる。

ただ、課題3では、登園時、昼食時、そして子どもが主体的に活動している時の様子を想像しなければならない。それは、課題1と2では扱っていない時間帯である。そこで授業者がそれらの時間帯について考えるポイントを簡単に伝え、そのあとは学生が自分で考えたり参考書を調べたりして作成するように進めている。

3 保育指導案作成における学生の課題

3.1 「カリキュラム論」での1年生の姿から

指導案作成の授業で学生が行うことは、大きく2点あると著者は考える。まずは、指導案作成の約束事を理解することであり、もう一つは、保育を想像して子どもの姿や保育者の援助を文章にすることである。

指導案は、保育者の保育観を他人に伝えるものであるため、作成する保育者の思いが誰にでも理解しやすいように記入されなければならない。そのために、はっきりと“きまり”として位置付けられていないまでも、“このように書くものだ”といった約束事やポイントを理解しておくことが

必要である。授業では、指導案作成の一般的な約束事を、何度も繰り返し学生に伝えて理解させることを試みている。時には個別に指導を行うなどし、できる限り丁寧に対応をしている。このようにすることで、3回の練習の中で徐々に身につけているように感じられる。実習が始まるまで約半年のブランクがあるために、覚えた約束事を忘れる者も多い。しかし、実習が始まれば実習園で丁寧に指導案検討をしてもらうことになるので、そこで指導を受けて繰り返し書き直しをすることで再度思い出し、確実に身につけていくと考えている。

一方、保育を想像して子どもの姿や保育者の援助を文章化することは、かなり困難な作業である。指導案に書き込む文章は、ある程度パターン化できるため、これも繰り返し書くことで身につけていくだろう。しかし、保育現場を見た経験がない学生には保育を想像することはできない。そこで、保育の現場を知ることが目的とした1年次の授業“体験学習”で、附属幼稚園を1時間見学する機会を3回設けてはいる。しかし、それは、9:00から10:00までの子どもの登園が完了していない時間帯であるため、設定保育等で保育者が子ども集団を保育する場面、つまり、指導案に書き込む場面の保育は見学できない状況なのだ。

以上のような本学科1年生の指導案作成の様子から、次のことが課題としてあげられる。それは、学生が指導案を作成するためには、保育の現場、つまり子どもの実態や保育者のかかわり等を理解しておくことが必要だということだ。

3.2 教育・保育実習での2年生の姿から

1年生で指導案作成について学び、実際に教育実習や保育実習で指導案を書いた2年生の様子はどのようなものであろうか。

著者が本学に勤務して本年度で4年目を迎えたが、実習時や実習後に毎年必ず学生から「指導案書きは、大変であった」という感想を聞く。“大変”だと思ふ理由は、実習中すべきことや考えることが数多くあるのに、指導案作成にかなり時間を費やされたことであった。どのような活動をするか、どのような流れにするか、そして自分の考

えをどのように文章にしていくか等、様々なことを考えて一つの指導案を仕上げなければならない。そして仕上げたかと思うと何度も書き直しをさせられる。このような指導案作成での苦労は、学生が力をつけるために必要な経験であるが、実践に向けて教材研究をしたり環境を整えたりという、直接子どもにかかわる作業にも力を注ぐことも必要である。指導案作成に費やす時間が少なくて済むように、「カリキュラム論」での学びを、課題に取り組む中で確実に定着させることが求められる。

本学科では、実習がすべて終わったあと、「保育・教職実践演習」の授業で、実習に対する記述式のアンケートを取っている。その中の質問項目「指導案について指導されたことがあったら書いてください」に、100名中64名が“言葉を書き入れるなど詳しく書くこと”“子どもの姿を細かく書くべきと指導された”などとあった。ここから見えてくることは、本学の授業で“指導細案”と学んだものを、保育現場では実習生に“指導案”として求めているということである。さらに、64名の返答には、“子どもの姿をもっと想像すべきと指導された”との記述が多かった。幼稚園と保育所、それぞれ20日間の実習では、学生は子どもの姿をまだ的確に把握できないし、子どもがどのように行動するのかを想像する力も十分には身に付いていないようである。子どもの内面を理解し、行動を予想する力を実習前に少しでも身に付けることができれば、指導案作成が速やかに行えるのではないだろうか。

3.3 課題から見えてきたこと

指導案作成について学ぶ1年生と、実習で指導案を作成した2年生の課題から、本学の学生が指導案作成について理解を深めるためには、十分に子ども理解と保育の理解をすることが必要であることが見えてきた。現在行っている附属幼稚園での体験学習の方法と回数ではまだ十分でないようである。学生の中には、長期の休みを利用して保育所へアルバイトに行くものもいる。そのように、子どもとかかわる機会を多く持つよう、日常的に

伝えることが必要であるように感じる。

4 これからの展望

4.1 体験学習の充実

子ども理解や保育の理解をねらって実践している体験学習は、現場(附属幼稚園)と連携して行っているものであるため、現場の考えと保育者養成校の考えを出し合って進められる重要な取り組みである。よって、子どもの様子や現場の様子を学生に理解させるために、体験学習は続けるべきと考えている。

しかし、前述のように、1年生で3回、しかも1時間ずつの見学では十分ではない。そこで著者なりに方法を考えてみた。

まず、体験学習の回数であるが、子どもは1年を通して日々成長し、年度初めと終わりとは実態が大きく変わってくる。それで、現行のように3回は行いたい。

時間に関してであるが、園の1日の生活の流れを理解させるには丸1日の見学が必要だと考える。子どもが自由に過ごしている時間、設定保育の時間、食事の時間、登園や降園の時間などすべてを見ることで、その都度保育者がどのように子どもにかかわりどのように行動しているのか見えてくだろう。各回異なる年齢に入れば、年齢による子どもの生活の様子や発達の様子も理解が進むだろう。

3回の見学をすべて同じ形式にするのではなく、現行のように“観察・記録だけの日”“一緒に遊ぶ日”と変化をつけると気付きが多くなると思われる。できれば、現場の担任教師が指導案を書き、指導案に沿った保育を展開して反省まで行う場を設けると、学生の子どもの理解、保育の理解、指導案作成の理解にしっかりと繋がるのではないかと期待する。

しかし、これは保育者養成校の1教員である著者が考えていることで、実際に実現可能かどうか、学生の時間割変更や附属幼稚園の教育活動への影響などを十分に話し合っ、可能な範囲で進めなければいけない。そのためにも、附属幼稚園との連携を密に取り、共に保育者を育てているという意識を持って、実現に向けて動いていければと考

える。

4.2 大学内保育室の設置

指導案を作成する時、“保育室内の環境をどのように構成すると子どもが活動しやすいか”“このように物を配置すると子どもはどのように行動するだろう”など想像しながら、子どもの動きを予想したり環境構成を考えたりする。しかし、現場を知らない学生には想像が難しいのが現実である。そこで、少しでも保育を考える助けにするために、学内の空き教室などを利用して“保育室”を作り、実際に遊具や用具を配置して保育をシミュレーションしやすい状況を作りたいと考えている。グループで保育環境を構成し、他グループが子ども役となって動いてみるなどすることで、机上で一人では思いつかなかった子どもの様子や保育の流れが見えてくるのではないかと考える。「保育は環境を通して行う」ことが基本である。学生のうちに環境について念入りに考える機会を作ることで、“何をどのようにどのくらい準備するか”を、カリキュラム論での指導案作成の時から丁寧に記述するようになるだろう。そして、このような経験から環境構成を考える際のポイントが分かり、現場での実習では不備が減り、学生が自信を持って保育に取り組める状態になると考える。

4.3 他科目との連携

2年生前期に開講されている「運動遊びの実践」では、学生がグループごとに運動遊びの指導案を作成し、作成したグループが保育者役に、他のグループが子ども役と参観者となり、指導案に沿った保育を実践している。授業の最後には受講者全員で活発に意見を出し合い、より良い保育を行うための学びを深めている。これにより、本学科の学生は、1年生後期開講の「カリキュラム論」で指導案作成の基本事項を学んだ後、「運動遊びの実践」で実際に指導案を書いて保育を実践し、そして実習に入るという流れを経験することになる。

この学びの流れは、学生の実習へ向けての学びとして、とてもよいものであると考えている。しかし、現段階は、教員それぞれが担当科目の授業

内容を充実させるために考えたものであり、連携し合って考えたわけではない。そこで、まずはこの2科目の担当教員が連携を取って授業内容のつながりを明確にすることで、学生の学びを一層充実させていきたいと考える。さらに、その他の科目でも連携を取り合うことを目指したい。

4.4 視覚教材の作成

学生が保育の様子や子ども理解を進めるには、現場を直接見るが一番であろう。しかし、授業として現場に出向く機会を数多く作ることは困難である。そこで、現在「カリキュラム論」で課題1・2・3に挙げている3つの保育場面の映像を、附属幼稚園等の現場で撮影し、授業者が解説を入れながら学生に提示する方法も考えている。撮影を行う場合、留意することとしては、著者が学生に伝えたい保育の内容を現場に伝え、現場の保育と著者の保育観にずれが生じないようにする点である。これも現場との密な連携が必要と考える。

5 おわりに

本稿では、学生が速やかに指導案を作成し、現場でこそ得られる学びをしっかりと自分のものにできるようにという思いで、「カリキュラム論」での指導案作成の内容や方法の振り返りとこれからの展望を述べてきた。その内容のベースになっているものは、学生の日ごろのつぶやきであったりアンケートであったり、そして、著者が授業を実践して感じたり捉えたりしたことである。そこでこの先、現場の保育者の声も集め、現場が学生に求めている力は何であるのかも探り、授業内容の充実に生かしたいと考える。本学科で学ぶ学生が、保育指導案作成という活動を通して保育者に必要な力を身に付けられるよう模索を続けたい。

参考文献

- ・開 仁志 2008 これぞ安心！保育指導案の書き方 北大路書房
- ・開 仁志 2012 保育指導案大百科事典 一芸社
- ・岩崎淳子 及川留美 粕谷亘正 2015 教育・保育課程論 書いて学べる指導計画 萌文書林
- ・文部科学省 幼稚園教育要領 2008年度改訂版